

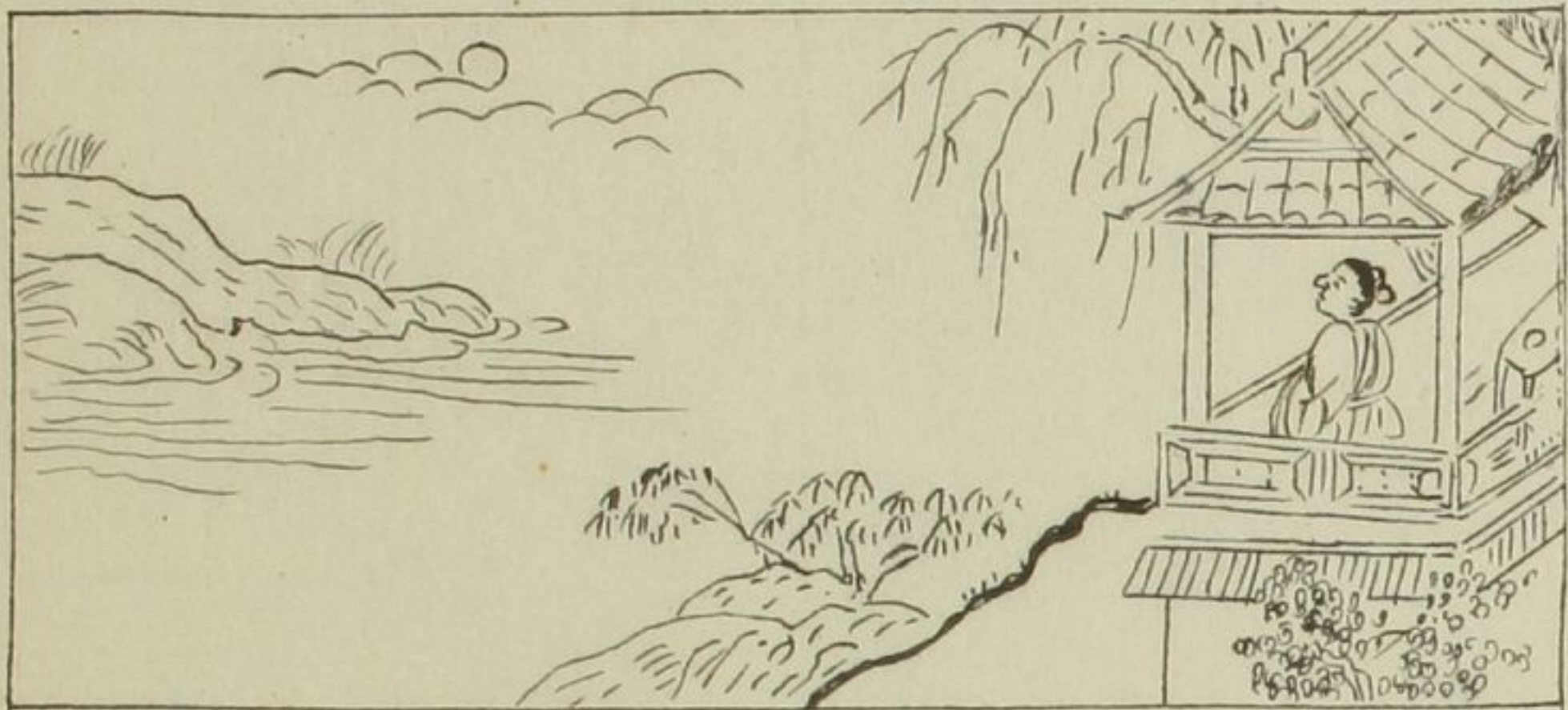
中村俊定文庫  
文庫 18  
238



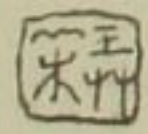
元文二 掃月撰

俳諧中々寸坐被

原題坐臥二非云



樂松只俳道雪也月也花也  
 皆俳也各隨其所見相與  
 唱和吟詠賦雅懷者誠騷  
 人之事而至專主張聲伎  
 遊宴為得雪月花之趣則  
 非同日之談一日見清人  
 魏惟度題八居詩而感嘆  
 其人富風月越作俳句叨  
 述八居之趣矣  
 掃月閒人弄花自書





第一

目新や中掃おろそけ掬の上

掃月

林原をたぎりて遠くを里

松封

新酒の残人よ金を見せりきて

惣堂

く〜〜時をた下戸も一巻

子也



八居題詠

元文二丁巳年初冬日	廓居雪	樓居月	巖居雪	山居月
	第居雪	村居月	水居雪	船居月

霊山を夕日静よりきりて

水

暮れ中より猿をへり嘆

暮

舟の心と水邊の所現き

暮

蜷川殿の折よ幸

月

きのうの雨をきり降りて

暮

舟の味を押し寄す

水

あれらの水根をたどり

水

茶屋を過ぎて

水

朝の光をうけ

水

野をへりて

水

ぬきまをたどり

月

振神をたどり

暮

髪をたどり

暮

あまの神をたどり

水

葉とく川樾も月おのほひる  
 娘とけ娘しひと虫の機織の  
 針百七をぬ彼家けを加括  
 志似てもあつま川おの花  
 白妙に孫帽子の管たん象  
 海と足をとりのほけき  
 起 水 書 月 起

第三

山石をふと鑄みくまなり雪と山  
 能くけあむいと祝く谷川  
 山姓もあつた様よ思ふれて  
 夏の際もぬきあけ此走  
 弄花  
 片月  
 杉雪  
 南枝

昔暮しを最れを隠して行の月 葉林

講釈と持たぬ虫も鳴 重

光らるる百たおく様も身よみて 月

神とてあつたやうな立脚 林

ふんまると狩山ぬく堀ちりり 重

曲突は人持たぬ電よあきれる 花

舌場より阿まむくは世の友 枝

手名をとけくろ接穂好あり 月

うらみも毎日語次を所現き 林

茶海屋くくも汲よ来ら井戸 枝

は空を月利遠くは晴こちき 月

冥ふれ是よりいなりぬ火藏 重

小便と沖の鷗はあらく向 花

三保と向くさと忘れし松原 林

朝風吹けとも月此脚連一  
 古郷へ康の子常此葉入  
 お撲とらと聞ていやは新河の古  
 暖の巻又浦川戸母と勝か  
 京香結唱して花も子此  
 紙巻よ津巻てもげふ時津風  
 枝 林 花 雪 月 枝

第三

高柳は横筋くも初月お  
 橋にとくまきさう所まきう今  
 百人首拍さ神も雪のぬき  
 乳母いやめと現く技折戸  
 掃月  
 養原  
 民花  
 細白



我年此幸しきよやしくたき証  
 いづれをばやの雪にあきあ  
 市はさく立てぬはく川衛  
 今町くも駕よ似城  
 此徳右の死ひて人目此聞は  
 程ひあふと背戸の張物  
 隣くあひりうきくはむ  
 白 雄 花 月 原 花 証 維

こんふ前後よ節借配し世  
 美此ぬ妓王と茶香の叫も  
 算に玉とりの名を聞てまぐ  
 生玉とやせしふくはにれ物後  
 日々に流りしる門のうら水  
 堀てやの跡米もはる夏柳  
 宗旨揃とて物も候めり  
 雄 同 花 原 旬 雄 系

月の入る西国あはれん長井様  
 相模取はくまきさうりんと  
 聖ふして家々へのやまを具  
 他館の川うきまへ見舞  
 縁日の本井向ま花も灯と  
 風井佳来ま飾もあつちり  
 白 月 花 系 維 白

第四

酒賞此大事を脱くや笠の雪  
 訓建ぬ都まお屋ひと  
 魚とく子のお着ま日の出  
 美殿極ははや清手おる  
 弄花  
 九鐘  
 桂枝  
 君山

ウ

元々分りいふ事なき事なり

田中の春よに川と石明

菘入れあれは孫右の娘や

二指貫目いさゝか花架

空き日を湯尾作は湯茶もよ

梅の又輪ようくひさしやう

お比良尼はあらの世もむう

田

林泉

枝

鐘

泉

枝

花

山

ニ

右俄めはれや雛と一對

碓をぬむ足もく日新

山野まじりて娘くおあてや

昔のちの娘よあまのこを笑く

這入きい毎いのあめはる

望人も紫傘折て俄出突

彌代時あれや月也凄きも

鐘

泉

山

鏡

枝

花

泉

押ッ付と花礼ひと前り少く  
 破れ清子と聖節五りせ  
 丸倉とむきちりり桃の皮  
 降を鈴へやもきお花穴  
 葉倉と大和河内のむね時  
 縄引とええなうも畑打  
 山 泉 花 枝 鐘 山

第五

竹揚てと稱と汲や月の氣  
 厚れ様と標と昔と見え透き  
 五りよととお筆ととあこもり  
 市人も花をけ鐘とせお白く  
 掃月  
 翠羽  
 炊陽  
 専安

ウ

大寺より志津まうりくる山おろし

石矢

茶漬はとりのちやつとちうり

羽

初うおりの姿を伯父も忍入

羽

世は節季の拍子せりき

月

垣断りと酒屋を遠く

羽

春は佳果よりききし紫橋

矢

雲雀籠あしうせれあ泉を

安

二

たをる羽織の丈も永き日

羽

仙臺も今う都に賣云葉

矢

瓦のうけ行脚めくあそ

安

き或種おろくそたのりい

羽

新にけりあめ神も鏡口

羽

藤あて妹と姉のあしき

月

三味線弾の抱くよけ

矢

夏秋に埃の中より夏は月  
 見世に夏は冬と成りて心  
 なるしよるまの鍋の如くさ  
 子安きなりとありて夏は面  
 空癖と花の氣をよみ舟はく  
 振くよりまのまのまのまの  
 夏 矢 羽 陽 月 姿

第廿六

雪は白布も鳥も釣る水は石も築  
 羽風はさるる鴨も鰥も 斗夕  
 あの鐘に撞きこゑは極りて 至芳  
 輝く人お祖父の筈用 青牛

夕月此舟をいぢし又も初

宿りも遠き舟を頼あり

龍崎をわきわけて舟よもきり

又も舟よも風を頼

湯豆府とお食ひくち知れ

陽しあけひよかの業お下

おれりも足れらるる地のを

東向し野中いふを眺り

大廠を半く塔を舟に遊いら

事もおろくちやるあぢ

生駒りよぬ難波の初時

舟をわきわけて舟を頼

鍋破りも面白もなき女

五りも遠き舟を頼

⑤

⑤

けりて居るうちいづれも三月廿日  
 房のいづれも軽の足とく  
 と存れれもむとりあぬる  
 直比流も三寸と阿基いよこく  
 入新地窟とを茶の穴  
 燕のあぢい西へひりへ  
 牛 子 花 芽 夕 牛

第七

縄を奈よ地のおも七月廿日  
 掃月  
 物あつた百やう 靱白のう  
 長汀  
 虫持た女中も忠ひ足ありて  
 宗二  
 雨と晴とも無ふところ  
 帘馬



礼日不明く山邊舟の片折戸

野笛

狸ヶ子福を聞はまのけふ

二

風は吹るみよあはれ

汀

新雪の吹よしのりなり

月

きこられそめいほえと孫

二

窓よの作候いあひなり

笛

焚れそえ福れ日和の帆を舟

馬

此よりあつらひ皆ゆく朝

汀

七智のふりまねいふを

笛

丸物をとるぬる白粉

馬

うさぎよあはれきれおのひり

月

片降のしとけ片照り

二

田中取り鶴も右様とおひや

汀

うさぎよあはれと櫛干し殿

笛

月のあやと種ふれ星月お  
 望んで病お柿の塩はよ  
 物寒北遠ひも山と里の寮  
 飛脚の語人て昔お柿の名  
 花もあよ昔お柿とりけて笑急き  
 桃も向ひよ橋お喜柳  
 馬 籠 江 二 月 馬

第八

雲をうお花よりよまお第う行  
 紙よりよまお花よりよまお第う行  
 いづかよお花よりよまお第う行  
 蝶お中おアよお秋う一ま  
 真花  
 杉洞  
 壺牛  
 触面

山里の月より文彦より 亭水

権現井湯より方もと流る 牛

一筋又渡世大よりと釣の糸 調

今の女房より鼻毛のひら 糸

嘆むよ是見より此小神幕 畠

安井よりまねるる看板 佃

なまのまの長閑な顔の尻着を 牛

目もてうくと赤いお葉 畑

汁の実に何より背戸をあつちち 糸

あまのいもを此来てい無母 畠

大児に髪友と仕舞人より又小児 佃

楽人衆の膳ハ追く 牛

お花おちら庭もと本後よりほど 畑

月ハお人物菴の入れ 佃

畑の青い山あふふを巻く

牛

尻よあふれそはぐら強針

鳥

清あふおれははくはて酒一ツ

百

夏よ信濃のふぶ室婦

鳥

山あふ林麻の也をさくぬ

鳥

雛子の見くろる重よ新乳

四季混雑

日齋くきひぢめれる菊の鋏

乙虫

南か野と摘庵よあ茶山

麦阿

蛇の擗うけても伝や和くま

半輪

けををむよい咲く産う

山和

鱈釣る母や入江にわおくひ

杉洞

とくおれも流る水は流あふ

地環

臘八や七夕なりとも別を時 大和 茂燧  
 石川や類の光をを研心し 乱紫  
 紫の産は紅をを並ぶる月おろ系 長汀  
 月さるばや一川霧あつち在は 待比  
 永き日と念念して嘆や最の屯 作裡  
 月さるばの志の庵や神送り 至芽  
 苗代は燧や物事して悔らる 出羽 凡叶  
 唐破月を我の影は清くぬ系 斤石

子乙女や訓深は松は空体し 一戸  
 新夜を走川引こちを鳴子水 燕志  
 昼顔の笈のや猿のほり足 吾明  
 雪あはは悟りひくくや水仙心 西柳  
 咲候はあれは曇るぬあくる系 李夕  
 花子や舟は並ぶる赤育立ち 花梅  
 掛子も取津き立は垣は 瑞星  
 夜も物やあはれは乱風の色 淋水

一日の人よ破れてや眺月 十午  
簪帯もあつて果るや鶴頭也 焮陽  
鶴もちと上見よとてや暖雪を桂 瓠葉  
若ん房の面をを福のぬやあとい 翠羽  
鶯や流れて水は流世帯 沂風

寺院よあぢひて

かほゆく自は柳りくやあ楓 尾張 巴静  
川柳も消して見えれい暁うま 野有

行春や麦の穂よゆき 伊勢 杉丈  
彩衣の秋をとんなれて子鳥は 春波 幾晩  
あつたは尾鱗の付くお鮎子 竹外  
我意古川白ひあを飛ぶ草 斗父  
古枝よもよめいよや郭公 子瓜  
扇屋の余前の骨折の里なり 三河 呂桂  
葛は葉や風よ見せらる浪 日 蓑 日 希有  
花巻うよきりあさう牡丹 日 桃鯉

姫松や来ては子孫代あまひ連 民地  
 風やうも熟柿の持こき人 風夕  
 桐陣と語も暇や和細代古 松封  
 新顔や明石よ舟代居あまひ 希因  
 文月の延くすは落る一葉り船 日 十代  
 初丁の及よ新まや和津此月 上 西奴  
 終立ひと川舟引いふひく噂事花 君山  
 早乙女と頬あはちや和朝日新 常島

水草此一青鏡やうき侍もこ 喜半  
 をのう尾よ袋巾着とん初代 専安  
 此代巻ハ襦あよぬき事する旅り子 童牛  
 室蘭やあまこおれ此あの新ひ 善原  
 立一各此とくく 山よ和れ松 宗二  
 山吹やそのまようりて宮と忘れ 板牛  
 津系り水てても尾を振る柳系 葉林  
 葉や構陣へあれし川の上 漁舟

稻妻あやうき彼も悟るより 三治 沃維  
 早ふかや牛も今息れあらし 日 林泉  
 夕立や瀬を障已らる入川 沼甲 石矢  
 山松も是見え顔れぬ紫衣、 袖孔  
 織り機も負もま白く窓の梅、 野篁  
 岩の腰くけて咲ゆき津下 燈籠  
 直ふゆふ曲里柱やあ花 片月  
 横顔をも月に見せてやさる 仄水

おろろや石よ小點の隠きんが 桂枝  
 三日月やまも落す空も 越後 海洲

東武昔侍の  
 松葉菴を尋ねて

竹柳の真まき 日 此柱  
 引綱此目ま 日 紫巾  
 美入や宵半棟の裾よ 日 敲氷 門扉  
 あれは上人 日 九鐘  
 一葉の息を 日 杖雲



暈をぬくあしきれききし 俄ちあ 外雲  
 猿の子は持ててんく 几中 蘭煙  
 糸巻やうき標子 結て岩の床 甲斐 羽揺  
 詩のあはれ川崎うて 時多う系 和橋  
 菱花灯のこゝききさや 月窓 喬丸  
 鶴の羽は白くもく と 枯野山 千畝  
 あこころ 京へ 追りて 時多う系 塩車  
 夕顔のあかりて 市へ 片折戸 白芳

寺のたれ池も 半分 枯野山 一林  
 あらこらと 花見く 庭を 津を 舟 南浦  
 梅の老や 笈よ 落 秋 重下 志映  
 起あつ 中 方と 春 少く 雪の 舟 桃鯉  
 空梅や 足く ぬ 枝よ 早も 咲 希敷  
 珠おる ぎぬ 鳩も ころりて 十 ねん 呂桂  
 屋敷に ちか かく 咲や 破の 波 水戸 片泉  
 持ひよ 輪の 蝶より 麦に 秋 秩父 紫格

月の笠見りける人も回極り奉  
時鳥を孫も

昔井也や暮又見透き隠れ里  
尾張 隆二

空うらやまの空あり連の屯  
以之

おの返あて芽出せ柳の那  
貞如

岩井戸の筒書やちうと鎌子持  
日 百松

松陰又帆をあげく人のさしこ  
但 緑岸

和歌や笠井ちうとと持り  
鳥谷

お梅や伴連れふ夏の涼久  
兔園

尾ようよと枯野の久せ津くを山  
春枝

各月の居る一他日と時久  
熊登 司鐘

岩又嘆て海は暮らるる雪井也  
後河 掬月

羨馬の足より輝き初時鳥  
日 花三

鳴れよ花ちうととれ山後山  
日 一甫

久立や八景の三井の鐘斗  
日 巨仙

淋しや時鳥の終れ月の影  
日 野芥

枝の枝よおぬと千さや糸柳 日 文糸  
 雪は白や煙う横きよるの粥 日 已白  
 紫のたもとさひくたまを水鶴 蕊 泰居  
 谷川を覗く癖や百合の花 柳童  
 朝穿れ幕をひとくや清見酒 柳橋  
 宵寐さるる中や笈うとよ 童 柳里  
 移の園此初は夏の月おろす 麥阿  
 不二とらんら僧や星夜をとりち向 三 三峽

萩の葉もあはれ紅葉あや十三お 白之  
 そ花の娘葉よ咲くをさるる 巴 巴雛  
 朝白も赤向て半中や河とさる 桃 桃湯  
 入およ持崩されぬ棧の那 河波 稚瑠  
 徳を柳よおろし柳花 日 百木  
 三月月よ射る落さるる雪花 日 柳緑  
 一丘も一削毛序るは里 日 鬼陵  
 雲よ是もさるる 日 梅富

飯沼河系ノ録ヲヤトシテ

常我の葉も銀ひてや蘭の花 美濃 庵元

洲は鳴花もさうり 日 達文

里にちよるもあやぬ牡丹花 女 宝瑞

ゆきとく本編りきさう 女 梅の花 美月

舟の子打厚着や尾そ丸裸 午花

一お病て一葉落さすや猿馬 文水

破山の種やこりぬく横貝 晴香

論語よむより近所の柳 越後 北冥

志し菊は雪を明けと寝衣 野紅

雛ぬりて影布ニハの菊は花 浮涯

和風の現ひてりや稲葉山 其山

一むしれ雪を山雨してあき水 不傳

釣名や笑ひぬ山も笑ひハササ 双鯉

釣上げく雪のやうに川鯉 南枝

屏風より梅 美濃 仙語

柳の如く春風吹送水舟久しき  
 我兄  
 津さくや柳の如く子に飛ぶ  
 朱唇  
 鉄月と光りの津さくや雉子越中多  
 麻父  
 水舟と杯合せ舟さく守日  
 之通  
 歌うちに若うい柳さくや木枝もは  
 蓼花  
 津比と川廣く立一し若柳さく  
 滝扇  
 鶴の如くこころさくや初ありし  
 宗俄  
 三月月も飛びく將の故きうさ  
 翔輪

あれり中よ宿ま梢や白桂、  
 兔鬚  
 松枝と彩色はせくはくくさ  
 凡乙  
 月影を疎よころさくや鳥は  
 呈瑞  
 つまゆふや畑打手も柳火打  
 古鷗  
 紅梅や舟も眠ぬくもゆき  
 蘭室  
 顔紅と障子明きるまふ船の香  
 翅白  
 春柳此月と波さくや肥つ舟も  
 触面  
 あれりさくや心魂の景耀喧  
 仙莫  
吉見

行るる 智童もあふれ 洛陽 山只

菊と見し 月角は 杜吾

桃燈よ くらきて 范季

糸料理のいろくま

病外を 磨められて

腰ぬけの家よ 暁や 童平

咲けりも ぬれを 有智

初おれ 月日向く 右範

天の戸 此の 越後 松仙

蝶も 羽と 谷水

稲妻 此の 瑞色

山風 此の 喜悦

まご 喜此 弄雲

なま 菜や 妙松

涼山 探り 楓江

るれ 菜の 三徑

神庭 入ら 芭蕉

洛陽

善儀

越後

女

尾張

五條坊

坊子の帆とあきて吹月芭蕉引 抱雪  
 蝶風子遊りまゝと萩詩 道輝  
 鉦柱に松も歌水の時より来 雅瑠  
 空顔を深好とあしむれ色 得秀常陸  
 草外も鏡に祝ふやまの葉 古淳日  
 三月月や里人とあう向く麻城角 諺費  
 兮刺りあれまき一芥子切主 玉仙  
 風と吹とさられ川本に葉お神七人 水花

涅槃舎や地ぬまう小田と中煙 大羽  
 梅の被り少く見まを花葉うま 眉壽  
 空葉や雪を被り地ぬの白ひ 亭水  
 志し希に瓦里はらう後り雪 筆花潜俊  
 一回清く風も好く好く後の月 時人豊収  
 休まうと藤に後合の葉摘ふ 恭川日  
 地花の意路もあめり葉外 玄駁趣前  
 拓きませし尻地はるぬらふの葉 章吹日

掃月庵あき八指を歌詠  
しそ其集を捲き巻と呼ぶ律  
悪く舞う舞う舞う舞う舞う舞う  
うやうううううううううう  
初め初め初め初め初め  
迷い迷い迷い迷い迷い

源氏行

極みあま細くのの外へやと心こころ一本いっぺん  
種たね芽めあま花はな子このの香かほううやとむ  
その長なが衣いいいあまささおおととああめめおおとと  
七しち橋はしのの中なかももああままううののこ  
月つき細こくくのの影かげよよるるりり  
みみ葉はれれ灼あかもも殿とのいいぬぬ好このき  
麦あへ阿あ  
美み心こころ  
宗そう瑞ずい  
瓢ひょう葉は  
海うみ貫くわん  
谷や水みづ



ウ  
弱下訪よ酒代妹茶と碇あり

孫奴  
烏醉

舟の恙々場を見せらりし

葵才

け神代ひり里又町もこりき

古鷗

親に老米の飯そとる

楓江

希揃て度れぬ樂茶女子とも

子瓜

望り飛んで切りる瓜園

双鯉

海草の叶も対しそ菴ひと川

花梅

隈裏着てあちふり中人

仙翁

尺八の音もいろくまきやどり

抱雪

余程清よ生あつる白磁

沂凡

笠目い月も焼くおぼめ

片石

九日代茶のあじり

竹外

心聲もすく海草の垂あひ

菊

丹波も分鬼いあひ

貫

脚の子も津お山燈をよ夏代秋

水

お寄りに口あるにまうせて

瑞

笑ひても笑ふやうなるお茶屋の内  
 地のみや晴々、雪は塵あさ  
 御後と紙回ハコトはさな  
 以の急車よ来て止那  
 校おろす鏡(能)よ水とつひら  
 ちそい峰りてきり月足奇  
 窓戸も入江るん安んや  
 今れ庄屋の稲も十分  
 凡 才 阿 郎 吾 汝 紙

お三休衣も都のちとぬむるお  
 宗旨具負れ寐もはめそと  
 き梅よよとゆとくる 垣階  
 嫁入もはせまを断大敵  
 あゝ日をやくる鳥の啼るる  
 二取くそまそと身申の吸物  
 家移りもむつと屏風の都層  
 左轂のゆりよそありこり  
 凡 石 貴 ぬ 阿 梅 静 水

管井用の鳴りこらうき新此月  
 之友く素ら良も望まされい様  
 雪とあつても羽織よ研うり  
 三 智恵よあこめり子の入滅  
 あや波む柄杓よ氷き日此移り  
 こと華しひよんを海士の力並  
 飛脚走おとろく今此面や時き  
 豆膏れたるわー かしこまらり  
 江 柴 外 取 吾 親 瑞 才

三味線の言いさう猿此の侍  
 地 一 おと いふや 龍又此噴  
 秘 藤りる牡丹りそいせぬりうり  
 音希ち真加よ叶し猿の糸尾  
 短又い何と昔学れくあさ  
 師 見よ抱ぬて雨より巻こ  
 湖もさるうふ月此明 藤り  
 かいよ 新れあはしこ藤り  
 江 ぬ 外 水 阿 石 凡 瓜

換せぬ合点て毛見の佳在傳  
 名之る心和高なれと閑口  
 山中此茶屋とて水と云ふる  
 おさむる居るあぬ多孰  
 撰集しれよ花の咲く時  
 身はまを履よかの松の風  
 柴 貫 以 石 梅 静

書肆 東門子藏板

昭和十四年八月三日  
 馬了  
 松亨文庫  
 後定花

